

機関番号：32665

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010 年度

課題番号：20510255

研究課題名 (和文) 「満州国」における女性の日本留学 (1932-1945年)

研究課題名 (英文) The Manchurian Women Students' Study in Japan (1932~1945)

研究代表者

周 一川 (ZHOU YICHUAN)

日本大学・理工学部・教授

研究者番号：00303008

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、「満州国」における女性の日本留学の背景、展開過程、結果と特徴を明らかにしようとするものである。三年間の調査（インタビュー、文献資料）と研究によって、植民地近代化の渦中に置かれていたその留学について、いくつかの側面をはっきりとしてきた。それは、政府の方針、留学の実態、女子留学の特徴、中国社会との関連などである。男子留学や他の地域の女子留学との構造的な相違も、部分的に浮き彫りになった。

研究成果の概要 (英文)：

The research aims to reveal the background, the process, the characteristics and the result of the overseas study of women students going to Japan from Manchuria. As the result of many interviews and documents research for three years, several aspects of women students' study in Japan at the colonial period have been revealed. The analysis of the policy of Manchurian government, the facts of overseas study in Japan, the characteristics of women students' study, and the connection with Chinese society are the main contents. At the same time, the differences between that of the men students and women students to the other regions are also partially revealed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：複合新領域 中国人女性の日本留学史

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：思想・運動・歴史・日本留学

1. 研究開始当初の背景

ジェンダーの視点から日本への留学史を研究する成果が近年いくつか見られる。これらの研究により、かつて日本の植民地であった台湾と朝鮮の女子日本留学の特徴、実態の大筋が明らかになったが、台湾や朝鮮とは異なった「満州国」型植民地の女子日本留学についての研究は、まだ、統計段階にすぎない。本研究はそれを明らかにすることを目的にしている。同じ東アジアで植民地でもあった三つの地域の女子日本留学の共通点や相違点を把握し、事例を通して「満州国」やその後の中国東北地方社会への影響も追及したい。

「満州」地域の教育に関しては、すでに膨大な研究成果があるが、1932年に建国された「満州国」における日本留学についての研究は極めて少ない。阿部洋氏は、日本政府の「対満文化事業」の角度から「満州国」留学生への学費補給などの政策を解明した（阿部洋著『「対支文化事業」の研究』汲古書院、2004年）。また、劉振生氏は、中国側の文献資料と聞き取り記録を中心に「満州国」の留学政策と日本に留学した人々の実態などを分析した（劉振生著『「満州国」日本留学史研究』吉林大学出版社、2004年）。しかし、同書は、ほとんど中国にある資料を用いており、日華学会や留学先の日本の学校などに保存されている基本的な資料を対象とした研究は行なわれていないので、まだまだ明らかにされていない部分が多い。しかも、以上の二つの研究にはジェンダーの視点による分析はなく、女性像が見えてこない。

近年「植民地近代と女性」の研究は進展し、「満州国」の女性についての調査研究なども見られるようになった。2001年11月の植民地期女性史第3回研究会では『満州』と女性をめぐる「満州国」の女性像や女性作家などについての研究発表があり、「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」研究の一環として、館かおる氏の『満州』における植民地的近代とモダンガールの研究も報告された（平成15-18年度科学研究費補助金「基盤研究(A)(1)」『2005年度研究報告集』）。だが、女子留学については本格的な調査は行われていない。

私は、長年、中国人の女子日本留学について民国初期を中心に研究して、博士論文にまとめ、日本学術振興会研究成果助成をうけ、『中国人女性の日本留学史研究』（国書刊行会、2000年）として刊行した。さらに、この研究を発展させるべく「満州国」の女子日本留学について調査した。「満州国」の日本留学政策と概況を調べ、『満州国』の留学政策と留日学生（アジア教育史学会『アジア教育史研究』第8号、1999年）という論文

を書いたが、女子の留学については、人数や専攻などの概要と一つの事例を把握したにすぎない。以上のように、「満州国」の日本留学に関する研究は、始まったばかりといった状況であり、特に、女子日本留学については、データを収集する段階に留まっている。2005年に植民地期における朝鮮と台湾の女子留学（朴宣美著『植民地文化支配と日本留学』山川出版社、2005年；洪郁如「台湾人女性の〈内地留学〉」『接続』vol.5、ひつじ書房、2005年）についての研究成果があった。今後は、更に朝鮮と台湾とは異なった「満州国」型植民地の女子留学はどういうものであったか、ということも問われることになる。

2. 研究の目的

本研究は、「満州国」における女性の日本留学の背景、展開過程、結果とその特徴を明らかにしようとするものである。これにより、植民地近代化の過程に置かれていたその留学の意味（目的と結果）、男子留学や他の地域の女子留学（政策と実態）との相違、その歴史的位置付けを解明することになる。

今まで研究してきた中国人女性の日本留学と違い、「満州国」となつてからは、その形態と性格が変容してきたことに間違いはない。日本の傀儡政府「満州国」の日本留学には、特別な政治的背景による特徴がある。「満州国」型植民地に置かれていた当時の女子留学生は、異なる文化（植民地的近代、非近代）、政権（日本、中国）、民族などの複雑な、矛盾に満ちた交差点に立たされていた。彼女たちは、なぜ日本に行き、何を学び、帰国後どんな役割を果たしたか、という日本留学に関わった各側面を、植民地文化現象の視点とジェンダー史の視点から分析し、「満州国」史、特に日本留学史における未開拓な領域を解明することが、この研究の特色と独創的な点といえる。

「女性の日本留学」という事象を全面的に明らかにすることによって、植民地近代化との繋がりや、周辺に暮らしていた多民族の女性社会への影響、そして「満州国」ジェンダーの社会的変化も見えてくることになる。

3. 研究の方法

日中両国に分散している政府、学校、組織、個人などの文献資料を収集したうえで、聞き取り調査も行う。元留学生の日記、手記、写真、回想録などの資料を集め、日中両国の文献資料と聞き取り調査の資料を照合して、留学に関する様々な側面を明らかにする。「満州」地域と「満州国」教育についての基本資料や研究成果は、日本側（満州国教育史研究会編『満州・満州国教育資料集成』エムティ

出版社、1993年；竹中憲一『「満州」における教育の基礎的研究』、柏書房、2000年など）にも中国側（斉紅深『東北地方教育史』遼寧大学出版社、1991年；斉紅深『見証日本侵華殖民教育』遼海出版社、2005年；楊家余『日本侵華教育史』人民教育出版社、2005年など）にもよく見られるが、その中には、留学教育や女子教育のものが極めて少ない。

「満州国」における留学（とくに女子留学）に関する資料は、中国東北地方と日本の政府機関資料館や留学先の各学校に分散されていると考えられるので、両国の資料館や関係学校から文献資料収集に着手する。同時に行う聞き取り調査は、口述資料収集には不可欠であり、文献資料に関しても重要な手がかりが得られる。さらに、存命中の「満州国」の留学生たちが皆すでに80歳を超えているので、その聞き取り調査は焦眉の急となっているのである。

具体的に二段階分けて作業を進めた。

第一段階（2008～2009年度）：文献資料をとりまとめ、聞き取り調査し、以下の内容を明らかにする。

①20世紀初、中国東北地方（関東州を含む）近代女子教育の開始と発展

②「満州国」成立後の教育政策と状況（女子を中心に）

③留日学生データ（人数、民族、留学校、出身校、帰国後の行方など）

④「満州国」の留学政策と「新京日本留学予備校」成立の背景と経営

第二段階（2010年度）：以上の資料を集めた後、資料照合と分析の段階に移り、「満州国」女性の日本留学の全貌を解明する。それに、同じ東アジアの日本の植民地である三つの地域の女子日本留学の共通点や相違を比較し、事例を通じて「満州国」やその後の中国東北地方社会（特に教育面）への関連も追及する。

この研究は、データから見られる女子留学の外面的な課題（展開過程と概況と役割）を解明するだけでなく、「満州国」留学生という特別な立場から生まれた心理状態、つまり、内面的な部分も、日本で高等教育を受けた女性知識人に絞って究明したい。

4. 研究成果

資料収集とインタビュー調査のため、2008年度2回、2009年度5回（科研費で3回、私費2回）、2010年度5回（科研費で3回、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究所の依頼により1回、私費1回）中国とカナダに出張した。

2008年9月13日～22日、2009年2月4日～18日に中国の北京、大連、瀋陽、済南に出張した。中国側の研究者の協力を求め、北京大学、山東大学、大連民族学院を訪問し、

本研究との関連情報（元「満州国」留学生の連絡先など）の提供やデータ整理などを依頼した。それらの先生方の協力により北京で元「満州国」留学生であった鄭氏（男、慶応大学留学生；元北京大学教授、「満州国」総理大臣鄭孝胥の孫）と呉氏（男、陸軍士官学校卒業生；新華社著名記者）と鐘氏（女）へのインタビュー（鐘氏は電話インタビュー）を行なうことができた。瀋陽では史氏（女）への電話インタビューを行った（もともとは直接インタビューする予定であったが、史氏が体調がすぐれないという理由で変更を求めたため）。ほかに、手紙と電話では連絡を取れなかった瀋陽在住の元「満州国」女子留学生の住所を直接尋ねたが、王氏と柯氏の住居はいずれもすでに取り壊されて、現住所は不明である。もう一人の王氏は入院中で、現在は意識不明の重体のため、インタビューはできなかった。2008年10月末に奈良女子大学（全身の奈良女子高等師範学校は積極的に「満州国」留学生を受け入れた）に行き、貴重な資料を手に入れた。また日本と中国の図書館などでも資料収集を行なった。2008年度の調査では、高齢のため健康状態の悪い人が多く、新しいインタビュー相手を探すのが急務であるのをよく感じた。

2009年度に留学生予備校同窓会が作成した1999年度『留学生予備校同学録』の名簿を入手したことにより、元「満州国」女子留学生への調査が本格的に始まった。山東大学王教授の処に拠点に置き、61名の女子留学生及びその家族へアンケート調査票を同封した手紙を出した。その結果、返信が15通あり、内10通はアンケートに回答したものであった。5通はその家族からの手紙で本人が重病で返信できないことや、すでに亡くなったことが書かれていた。住所不明などが原因で12通は戻ってきた。2009年度に5回にわたって中国の北京や東北地方に行き、連絡が取れた留学生にインタビューを行い、合計11名（内2名は電話インタビュー）の留学生がインタビューに応じてくれた。彼女たちは、留学事情や帰国後の状況を話してくれただけではなく、関連資料や貴重な写真も提供してくれた。同時に遼寧省档案馆、遼寧省図書館、瀋陽市図書館、日本の国会図書館、東京都中央図書館の実藤文庫などの資料館で関係資料を収集することができた。

2009年度から本格的に始めた元「満州国」留学生へのインタビュー調査は、かなりの成果（11名の元留学生へのインタビュー調査ができた）を上げている。その後、さらに数名の元留学生と連絡が取れたので、2010年度には、5回ほど中国とカナダに出張し、中国北京、天津、大連、瀋陽とカナダ在住の元留学生へ調査を行なった。インタビューを実施した元留学生の総数は17名にのぼった。同時に遼寧

省档案馆、バンクーバー公立図書館（Vancouver Public Library）、日本の国会図書館、神奈川大学留学生資料室などの機関で関係資料を収集することができた。さらに日本大学理工学部図書館を通じて当時の貴重な留学生名簿を手に入れることができた。

三年間にわたり、日中両国に分散している政府、学校、組織、個人などの関係資料がかなり集まり、特に日華学会が出版した留学生名簿（合計 18 冊）全刊と駐日満州国大使館が作成した『満州国留日学生録』（欠 1942 年版）を手に入れることができた。元「満州国」留学生からも貴重な資料をたくさんいただいた。

資料収集とインタビュー調査を行なうと同時に、インタビュー記録と文献資料の照合を行ない、いくつかの研究論文にまとめ、発表した。さらに、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化センターの依頼を受け、2011 年 7 月に同センター主催の「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」研究会で「[満州国]女子留学生と奈良女高師」の講演をした。

現在、集めた文献資料とインタビュー記録などを分析しながら、いくつかのジャンルに分類して（「[満州国]留学生予備校第三期卒業生について」、「東京女子医学専門学校における「満州国」留学生」など）、執筆する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

1、周一川「奈良女子高等師範学校における [満州国] 留学生」神奈川大学『人文学研究所報』NO.45、2011 年 3 月、査読なし、63～76 頁。

2、周一川「[満州国]における女性の日本留学—概況分析—」中国研究所『中国研究月報』、2011 年 9 月号、査読あり、15～30 頁。

3、周一川「日本における中国人留学史研究動向」（中国語）『日本研究』（中国遼寧大学日本研究所）2009 年第 3 期、査読あり、30～33 頁。

4、周一川「近代留日史研究における三つの問題」（中国語）山東省社会科学院『東岳論叢』2008 年第 3 期、査読あり、133～138 頁。

5、周一川「中国人女性留学生のリテラシー」歴史科学評議会『歴史評論』2008 年 4 月号、査読なし、50～61 頁。

6、周一川「近代における中国人海外留学の流れについて—日本とアメリカ留学の比較」アジア教育学会『アジア教育』第 2 巻、2008 年、査読あり、62～71 頁。

〔学会発表〕（計 4 件）

1、周一川「[満州国]における女性の日本留学—インタビュー調査の報告—」神奈川大学「中国人留学史研究会」2010 年 10 月 1 日、神奈川大学。

2、周一川「[満州国]女子留学生と奈良女高師」奈良女子大学アジア・ジェンダー文化センター「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」研究会、2010 年 7 月 23 日、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化センター。

3、周一川「日本における中国人日本留学史研究動向」（中国語）中国遼寧大学主催『中日関係の現実と未来国際学術シンポジウム』2009 年 9 月 19 日、瀋陽富麗華ホテル。

4、周一川「近代における中国人海外留学の流れについて—日本とアメリカ留学の比較」アジア教育学会 2008 年 5 月 11 日、九州大学教育学部。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

周一川 (ZHOU YICHUAN)

日本大学・理工学部・教授

研究者番号：00303008

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者